

第2章

運動状態からの視点

シーケンスにより空間のギャップを強調する手法

主に内部空間に用いられる建築的手法。観察者の移動に伴い、空間のギャップを作り出す。移動した時に大きな空間的ギャップが起こるほど、観察者の驚き、印象は強くなる。人間が動く生き物である以上、建築設計において極めて重要な手法であり、また通過する空間の順序も重要である(経路の重要性)。第一章の設計手法も、内部空間の強調については、このシークエンスを作り出すための手段と解釈できる。巨大さより強調するシークエンスとはどういうものかをここでは論じる。

2.1 洞窟型



図
(ノイシュヴァンシュタイン城地下通路)

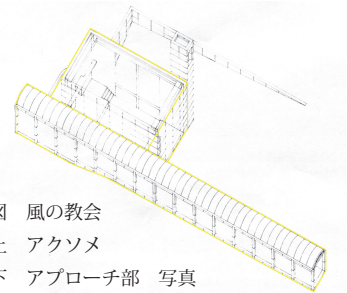


図 風の教会
上 アクソメ
下 アプローチ部 写真

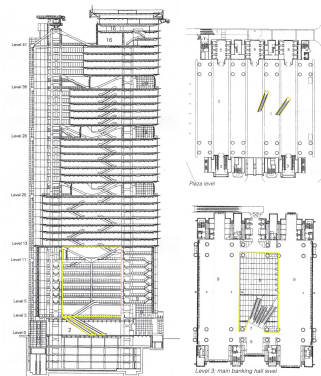


図 香港上海銀行
左上 断面図
右上 平面図(地階・二階)
右 地階写真



大空間の前に狭い小さな空間を観察者が通過出来るような設計。

4.5 × 4.5 × 2.2m の部屋が二つあったとしよう。一つの部屋には 0.8 × 2.0m の入り口がついており、そこから入る。もう一方は 0.8 × 2.0m × 奥行き 10m のトンネルを抜け入る。同じ部屋の大きさでも、体感する大きさは後者の部屋の方が大きい。天井高、色、素材、光環境などで出来る限り大空間とのギャップが大きな空間が望ましい。また、観察者にとって出来る限り長時間「狭い小さな空間」が経験された方が大空間に移動したときに体感されるギャップは大きくなる。

現代の高層ビルやタワーでは、主にエレベーターで移動するので、この移動が洞窟の役割を果たしている場合がある。また高層階では音環境も敷地周囲とは距離的断絶がはかれ、ギャップを作り出すことが可能である。

また照明・家具配置や壁面のデザインなど、細部の意匠の変化でもギャップは作り出すことが可能である。

<風の教会 1986 >

安藤忠雄設計。コンクリート打ちっぱなし仕上げの教会に入るまでに、スリガラスとRCフレームの連続する長いアプローチが作られている。このように何も無い廊下のような空間を安藤は 21_21 などでも設計している。

<香港上海銀行 1985 > 香港

ノーマン・フォスター設計。

ビルの一階には、外部空間があり、エスカレーターが設置されている。そこから上ると、巨大な吹き抜け空間に出る。ここで吹き抜け空間とビル一階の空間の間にはガラスの膜が張られ、エスカレーターで上る際に徐々にその先の巨大な吹き抜け空間の存在を知る。このように、突然の空間ギャップではなく、その先の巨大空間を徐々に感ずるという体験は、トップライトや洞窟型特有の演出法である

＜オスロ オペラハウス 2008＞ ノルウェー

スノーヘッタ設計。

駅から専用の通路が設けられ、抜けた先から海辺の巨大なオペラハウス全体が見渡せる設計となっている。海辺での敷地や、巨大な斜面を作り出した建築の設計を活かしたアプローチ。視界の突然の広がり、5mほど上部から見渡す建築の作り出すランドスケープとの対比が心地よい。

巨大な建物の外部空間を斜面状にし、人々に開放している。ファサードは全て白い大理石で作られている。多角形の外観は海辺に浮かぶ流氷のようであり、自由に登ることが出来るため、常に人々が集っている。内部空間は巨大な一室空間と劇場とに大別出来、比較的シンプルでな構成であるが、吹き抜けの天井の高いエントランスは、ガラス窓からの採光で明るく開放感に溢れている。また外部の斜面がそのまま内部から見る事が出来るため、空中を人々が行き交っていくかのような不思議な光景を目にすることができる。

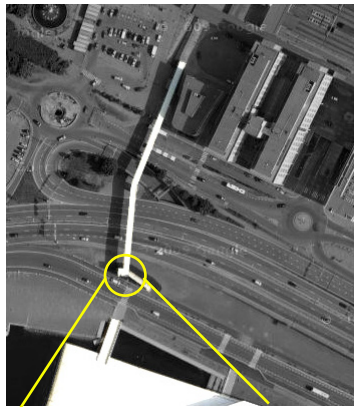


図 オスロ オペラハウス
上 敷地写真
中 専用通路入り口
下 敷地写真黄色丸部分からの眺め

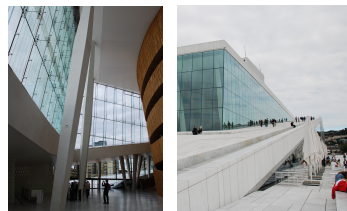


図 オスロ オペラハウス
左上 エントランス
右上 斜面
下 エントランスと外部斜面

<青森県立美術館 2006 >



青木淳設計。

青森県立美術館は、展示室の「天井高」や大きさ、「素材」が部屋ごとに変わるシークエンスが実現されているが、この美術館にとって、そこにたどり着くまでのアプローチも、シークエンスの重要な一部分にあたる。この美術館では、「湾曲」しパースペクティブを強調する庇のついた奥への距離を強調させている。しかし、「三内丸山縄文遺跡」の発掘現場から着想を得て設計されたというこの美術館は平面的に実際広大であるが、エントランスアプローチからの印象はそれと逆のものである。前述の庇も、美術館正面から近づく場合には全く影を潜め、低層（一層）のボリュームは正面ファサードの背後に隠れている。外観の印象を出来る限り小さく見せ、美術館内部とのギャップを作り出すことに成功している。

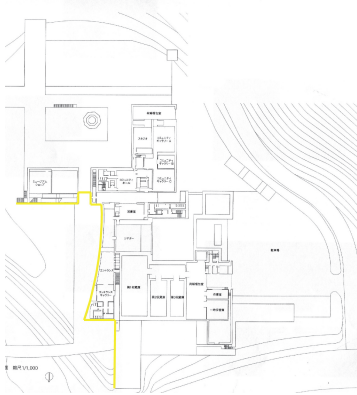
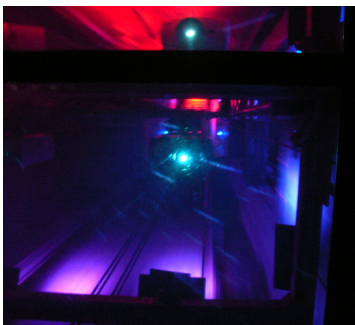


図 青森県立美術館
(上から) 外観写真 平面図 断面図

<ロックフェラーセンター 1939 の展望台エレベーター>



ロックフェラーセンターの展望台へ上るエレベーター。

エレベーターのチューブ全体をガラス張りにし、周囲を見渡せるようなものが多いのに対し、このエレベーターでは天井がガラス張りとなっている。そのため長細いトンネルの中を高速で移動するのが身を以て体験出来、「エレベーター=『洞窟』」という図式をすんなりと受け入れることが出来る。

図 ロックフェラーセンターエレベーター

2.2 大空間の囲み

非日常の大空間を作り出すことが出来れば、それだけで周囲からのギャップを作り出す。スタジアムやドームなどの例がこれである。この大空間の囲みは、三次元的に囲われるものが想像しやすいが、三次元的に囲まれていなくても、回廊によって平面的に囲まれる空間もまた同様の効果をもたらす。

<グランパレ 1900> フランス

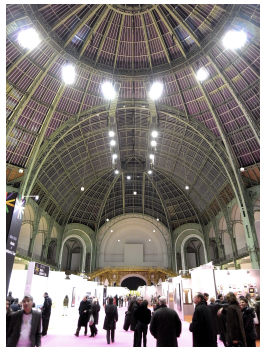


図 グランパレ

1900年のパリ万国博覧会のために建てられる。アンリ・ドゥグラン、アルベール・トマ、アルベール・ルヴェ、シャルル・ジロー設計。石造りの外観とは裏腹に、内部には高さ43メートルの鉄筋構造の丸屋根が作り出す明るい巨大な空間が広がる。

<マンハイムの多目的ホール 1974> ドイツ

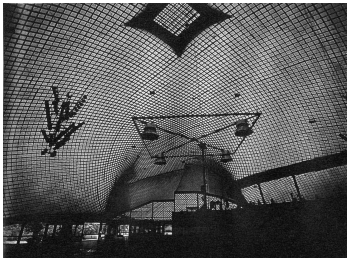


図 マンハイムの多目的ホール

フライ・オットー設計。最大高さ20m、最大スパン85m、面積7400㎡。5cm角の木材によって、軽量、均質で、所定の強度、弾性を持つ構造体を実現した。屋根の膜材はポリエステルである。

<東大寺 8C 前半>



図 東大寺 伽藍

回廊で囲まれた寺院の伽藍配置も、同様の効果をもたらし、足を踏み入れた瞬間にシーケンスによる空間のギャップを感じさせる。